



## こころの玉手箱

イーパーセル社長

北野 譲治

2

写真は中学生当時のもの。自分で言うのは少し照れてしまうが、文学青年だったと思う。

母方の本家当主の長男で僕より8つ年上の尊敬するいとこがいる。その存在が、世界の古典文学にのめり込むきっかけになった。僕は彼のことを「お兄ちゃん」と実兄のように呼んでいた。驚くほど博学多才で、勉強も遊びも僕に付き合ってくれた。

中学生になると「これを読んでみろ」と東京の大学で学生生活を送っていたお兄ちゃんから、何冊もの本を勧められた。ランボオの散文詩集「地獄の季節」や

ドストエフスキーの代表作品「カラマーゾフの兄弟」、ヘッセの「デミアン」などあらゆるジャンルの作品をお兄ちゃんは勧めた。

今にして思えば人生経験が拙い頃。これらの大作をどれだけ理解して味わうことができただろうと心もとないが、そびえ立つような大作の一端なりとも触れてみたいという気持ちで懸命にページをめくった。

高校生になると、友人たちから「鉛のカバン」と呼ばれるほど重量のあるカバンを持ち歩き、中には何冊もの古典とともに小林秀雄のエッセー「考えるヒント」をいつも入れていた。ラン



大作のページをめくった中学生のころ

夢中になった世界の古典文学

## 尊敬する「お兄ちゃん」に導かれ

ボーとの出会いが、永遠に読み継がれる小林秀雄の名著に導いてくれた。

17歳の春、岡山市立市民文化ホールで岡山県出身の作家正宗白鳥の生誕百年記念講演会が開催された。小林秀雄と安岡章太郎と大江健三郎の3人が登壇するといっので、放課後に同級生を誘って駆けつけた。人であふれかえった会場では客席には座れず、階段廊下に腰かけて話を聞いた。

目の前に小林秀雄がいると思うだけで鼓動が激しくなり胸が高鳴った。17歳の若者に当代最高峰の批評家の講演内容を理解できたはずもないが、とにかく生の言葉を聴いて最高レベルの知識と教養を自分のものにしたという挑戦だった。

写真の中学時代といえど、そろそろ将来を考え始めるころ。「建築家は誰からも尊敬される素晴らしい職業だぞ」とのお兄ちゃんのアドバイスどおり、早稲田大学理工学部建築学科に進んだ。